



算盤組立職人

Vol.08 テレビ取材の傾向と対策



「テレビの取材がやってくるのだよ。」
「おいおい、展開が早いなあー!!」
環境の変化がとんでもなく早い事に少し引いた。
「あー龍雲ってさ、喋るの苦手じゃん。」
「うむ。」
「ずーっと黙っていても平気じゃん。」
「そだねー」

「テレビ、大丈夫なのか??」
こいつは事前に決められた内容を話す事に關しては、とんでもなく上手い。ただ、自分の意見を求められると突然ボンコツになる。

「大丈夫も何もあらかじめ話すことを決めておけば良いのだよ、佐藤くん。」
あ忘れてた、こういう奴だったんだ。
「IT業界からの転身、そういう流れなら大体の傾向が分かるから対策なんていくらでも取れるのだよ。」
「忘れてたよ、そういうの得意だもんない。」
「えへん、それほどでもないけどなー」
まあ九分九厘問題なく終わるだろうな。

「…デジタルからアナログに、いや、そろばんは離散的に表現するから『デジタル』だとしてみるか…」
もう受け答えのコミュニケーションが終わって笑いを取るうとしてるな、こいつ。

それから1週間程たったある日行きつけの喫茶店でモーニングを食べながら近況を話していた。

「そうそう佐藤くん、例の放送日が決まったよ。」
「例の、って撮影にくるって言ってたやつか?」
すっかり忘れていた。テレビの撮影がきたんだった。

「あれ? もしかして忘れてた??」
こいつの勘の良さには勝てる気がしない。

「忘れるわけじゃないか、…つなあ。」
「ふーん、まあ放送日を伝えて念のため後日録画したDVDを渡せばいい事だしね!。」

「こつちでも録画しとくけど、もし忘れてた時にはお願いするよ。」
うん、忘れる気満々である。
「了解! 初めてにしては良かったのかなと思うんだけどね。」
ん、何か違和感が。

「もしかして、思うようにいかなかったとか、か?」
少し歯切れの悪い答えが返ってきたのが気になった。

「佐藤くん、さすが鋭いね!。僕も見習わなければならぬなあ。」
いやいやお前が言うか、それ。

「まあ、観てみてよ。で、直した方がいいことがあったら教えてよね!。」
「わかったわかった、必ず観るよ。」

(…よし、視聴者ゲット。)

「ん、何か言ったか?」
「何も言っていないよ!。」

結局視ることになってしまった。さすがに時間常的にリアルタイムでは観られないので、録画予約しとくかな。何か気になるようなことがあるようだし、実際に観ておくべきだな、つと。

「さて、録画は…できてるな。」
再生してみた。

profile 高山辰則(龍雲)

2014年より、伝統工芸士/宮本一廣氏のもとで修業。

2015年に播州小野算盤工房shinを立ち上げる。

「全ての人ではなく、できるだけ多くの人に気に入ってもらえる商品を作れ」という師の言葉を継承し、伝統的工芸品づく

くりを通じて、その歴史や技術を後世に伝えるために日々努力をしています。

播州小野算盤工房shin / 高山辰則(龍雲)

<https://tkymtatz.wixsite.com/abacus>